

式辞

中庭に咲いていた紅白の梅の花も盛りを過ぎ、桜のつぼみが、春の訪れを感じさせる今日の良き日に、晴れの卒業式を迎えられた第七十二期生の皆さん、卒業おめでとうございます。

そして、ご参列をいただきました保護者の皆さま、お子さまのご卒業、誠におめでとうございます。皆さまのあらゆる努力が、ここに身を結び、無事に義務教育を終了されたことに、心よりお祝い申し上げます。

さて、卒業生の皆さんは、中学校生活、そして義務教育九年間の最後の日を迎えました。今、手にした『卒業証書』は、皆さんが成長した証であります。『卒業証書』は、一見、皆同じように見えますが、三か所それぞれに違うところがあります。まずは、右上の番号です。これは、自分自身にしかない番号で、北稜中学校の第一回の卒業生から、脈々とつながってきたものであります。皆さん一人一人が、北稜中学校の歴史と伝統の中に、しっかりと刻み込まれたということです。誇りを持ってほしいと思います。次に名前です。保護者の皆さんが、子どもの誕生に心から感動し、深い愛情のもと、大きな期待と強い願いを込めて付けられた尊い名前です。これからも大切にしてください。三か所目は、その下に書かれている生年月日です。皆さんのかけがえのない命、この世に唯一無二の存在として誕生した日であります。この世に、たった一人の自分であることに自信を持って命を大切にしてください。そして、今日の日を迎えられたことに、多くの皆さまから支えていただいたことに、深い感謝の気持ちと、大きな喜びを感じてほしいと思います。

昨日の三月十一日は、十年前に一万八千人を超える犠牲者が出た『東日本大震災』が発生した日であることは、全校朝礼でもお話をしました。現在では、このような自然災害のみならず、コロナウイルス感染症などの様々な危機から自分自身の命を守ること、家族・友だち・地域の方々と協力し合って、助け合って、お互いの命を守っていくことが、生きていくうえで本当に大切なこととなっています。

卒業生の皆さんのこの一年は、今まで誰も経験したことのない未曾有の年でありました。昨年二月二十九日から、三ヶ月の長い『臨時休業』があり、君たちの三年生としてのスタートも六月からでありました。さらに、最初の二週間は、『分散登校』で、午前と午後に分かれて登校。給食はパンと牛乳のみで、お昼の音楽放送もなく、黙って前を向いて食べるまさしく黙食で味気ないものでありました。今となれば、あまり良い思い出とは言えませんが、懐かしく思い出されます。

五月に予定していた『修学旅行』も延期となり、さらに『水泳大会』と『合唱コンクール』の中止が決まり「これから本当にどうなるのだろうか」と心配をしましたが、しばらくの時間が過ぎた頃から、WITHコロナの時代であっても、様々な知恵と工夫で、今まで同様、いや、それ以上に楽しくできる方法があることに気づき始めました。

学校行事の一例をあげると、文化祭の舞台上で発表できなかった吹奏楽部は、体育大会の部活動紹介の中で演奏を行ったり、修学旅行のバスのレクリエーションでは、バスレク担当者が、事前に様々な出し物やクイズ、おもしろ映像等を、時間をかけて準備してくれたおかげで、楽しい時間が持てたことなども、そのひとつであると思います。昨日の『お別れ会』も、例年とは全く違う形でしたが、生徒会が中心となり企画し、在校生が心を込めてつくってくれました。卒業生の皆さんは、どのように感じたでしょうか。

コロナでの影響を少し前向きにとらえると、例年どおりにはできなくなったことを、後ろ向きに考えるのではなく、皆の知恵と工夫により、新しいものをつくろうという意欲に変えることが大切であると感じました。

先日、できあがったばかりの『卒業文集』を読ませてもらうと、その中に、素敵な一文がありましたので紹介します。ある女子生徒からは「一人一人がお互いを大切にする仲間であり、笑顔がいっぱいの『ありがとう』あふれるクラスの一員になれて、私は本当に嬉しかった」という心あたたまる言葉や、「友だちと一緒にいるのが、とても楽しくて、嬉しくて、この3年間北稜中学校で過ごせて、本当に良かった」など、友だちへの思いが、他にもたくさん綴られていました。

また、『修学旅行』では、3年生の先生方が、「私たちに何か良い思い出を」ということで、サプライズで夜に『気球』に乗る企画をしてくれたことへの感謝の気持ちをが書かれていたものがありました。さらに、ハンデを抱えながらも、修学旅行の体験活動での難関を突破した生徒からは、「達成したことに感動して涙を流してくれた先生がいたことが、一生の思い出になった」の一行は、私たち教師冥利に尽きる最高の一言でありました。

卒業生の皆さんは、今までは、中学校という小さな社会の中で生活をしてきましたが、義務教育を卒業すれば、さらに大きな社会で生活をしていくことになります。これからは、君たちのような『優しい心』を持った人が、それぞれの文化や言語、国籍や年齢・性別の違い、障がいの有無に関わらず、それぞれの人の持つ良さや能力が、最大限に発揮できる社会を創ってほしいと切に願っています。

結びに、私は卒業生の皆さんとは、2年間という短いつながりではありましたが、たくさんの感動を与えていただき、幸せな時間を過ごせたことに心より感謝します。次の社会においても、新しい仲間と助け合える、支えあえる関係を築いてくれることを心より願い、北稜中学校教職員を代表しての式辞といたします。

令和三年三月十二日

大阪市立北稜中学校校長 山咲進一